

検証・浦和電車区事件の真実 No. 13

民主化闘争情報 [号外] 2008年5月7日 発行 日本鉄道労働組合連合会 (JR連合)

第13回 執拗な追及でついに脱退を表明

2001年2月8日、Y氏(当該事件被害者)は、13時過ぎの出勤だったが、前日に分会役員のDから「明日11時にミーティングルームに来い」と言われていたので、これに従った。絶望的になっていたY氏は、また脅されと思ったが、会社に残るためにはJR東労組に服従するほかなく、組合も会社も辞めたくはなかったので、仕方なく指示に従った。

すべてが嫌になり「組合を脱退します」と発言

Y氏が出勤しミーティングルームに入ると、分会長の上原被告、小黒被告、Dら4~5名がすでにイスに座っていた。Y氏が、出入口側のイスに彼らと向き合う形で座ると、上原分会長は強い口調で、「みんなは、お前とは『もう一緒に仕事はできない!』と言っている。お前は どうするんだ!」などと何回も繰り返し詰問し、暗に「組合脱退」を強要した。直接、「脱退しろ」とは言わなかったが、脱退を求めていることは明らかだった。もはやJR東労組との関係修復の望みは絶たれ、「組合を脱退する」と言わない限り脅しが続くことを、Y氏は悟った。すべてが嫌になり、頭の中が真っ白になった。分会長のあまりのしつこさに自暴自棄になり、つい、「仕方がないです。組合を脱退します」と言ってしまった。

分会長は、その言葉を待っていたかのように、「いま言ったことをみんなの前で表明しろ、いいな」と、厳しく念押ししてきた。このようにY氏は、無理やり、皆の前で脱退を表明することを約束させられた。Y氏の発言により、この日の追及は約40分位で終了した。

事件発生の温床となった「ミーティングルーム」とは...

ところで「ミーティングルーム」とは職場1階にある会議室で、本来は会社の増収や活性化等を図るための「小集団活動」用の部屋である。ところが当時、ここに分会役員が常駐し、事実上、JR東労組専用の「分会事務所」として使用されていた。まさしく浦和電車区事件の温床となっていた場所である。当時、旧動労組合員が主体であったJR東日本の運転職場では、JR東労組の役員らが会社管理者の指導に従わず、事実上、職場を支配し、規律が荒廃し、社員のモラルも低下するといった由々しき実態が発生していた。会社管理者も彼らの横暴を制止できない状態だった。浦和電車区事件や三鷹電車区事件(注)は、こうした背景から発生したのである。この点については次号で詳述する。(次号に続く)

(注) 三鷹電車区事件とは (JR連合ホームページを参照)

浦和電車区事件の約1年前の1999年9月から2000年2月にかけて、JR東日本・三鷹電車区で、JR総連・東労組が、自組織の組合員であった運転士S氏に対し、JR連合組合員と交遊したことを理由に、職場施設内において集団で連日のように執拗な糾弾行動を行った。S氏はJR連合に加入したが、イジメはなおも続いた。会社は加害者の行動を制止すべきところ、その後、S氏を運転士から外して他職場に転勤、出向させることで事態を治め、今なお、運転士に戻れずにいる。S氏は、会社を相手に運転士への復帰を求める民事訴訟を行っており、JR連合は、S氏を全面的に支援する運動を進めている。

「検証・浦和電車区事件の真実」はJR連合ホームページに掲載中! <http://homepage1.nifty.com/JR-RENGO>